

# 自由な世界

上

フェイクデモクラシーと  
新たなファシズム

THE ROAD TO  
UNFREEDOM

RUSSIA, EUROPE, AMERICA

Timothy Snyder

ティモシー・スナイダー

池田年穂 訳



## 第2章 継承か破綻か（二〇一二年）

すべての独裁政権、すべての権威主義的な政権が短命であることは歴史が証明している。長続きするのは民主主義体制だけなのだ。

――ウラジミール・プーチン、一九九九年

無垢なる国家というイリインの発想は、持続的な国家をつくるには努力が要することを覆い隠してしまった。ロシアの救世主が世界中を魅了するなどという考えを持ちだしたのは、その救世主がどのような政治制度を築くのかという問いをはぐらかすためだった。二〇一一年と一二年の信頼性を欠いた民主選挙で、ウラジミール・プーチンは勇敢な救世主の役を引き受け、ロシアをイリインの提起したジレンマに陥らせた。いわく、プーチンが生きているかぎりロシアを良い方向に変えられる者はいないし、プーチンが死んだあとに何が起きるかを知る者もロシアにはいないのだ。

イリインの時代のファシストたちは、持続性の問題など眼中になかった。一九四〇年、ルーマニア人ファシストのアレクサンドル・ランダは、ファシストの指導者たちが「国家を永遠の力へと、国境から解き放たれた「神秘体」へと変えるのだ」と宣言した。救世主のカリスマ性が国家を歴史から切り離すのだ。アドルフ・ヒトラーは、何より重要なのは人種闘争であり、ユダヤ人を絶滅こそが自然界の永遠のバランスを回復させるのだと主張した。彼の千年王国が一二年間続いたあとに、ヒトラーは自殺した。一人の指導者が一世代の人々を惑わせたからといって、国家が存続するわけではない。政治の持続性という問題は、現在のことしか考えない者には解決できない。将来誰がどのようなかたちで自分の後を継いでゆくのか指導者が想像をめぐらすためには、まず自分や自分の一族の枠を超えて考えなければならぬ。

健全な国家とは、国民に継続意識をもたらすものだ。国が存続できるのであれば、国民は深刻な惨事を恐れることなく変革を思い描くことができる。国家を指導者よりも長く存続させるための仕組みは、継承原理と呼ばれる。一般的なのは民主主義だ。それぞれの選挙を行うことは、次の選挙があることを約束する意味を持つ。一人ひとりの国民は誤りを免れない存在なので過ちが積み重なってゆくが、それを将来への皆の信頼に変えてくれるのは民主主義なのだ。そうやって歴史は連綿と続いていく。

イリインを追放しプーチンを教育したソ連は、時間と関係性を結ぶのがうまくゆかなかつた。

ソ連には継承原理がなかつたので、たった六九年しか続かなかつた。ボルシェヴィキは、自分たちが始めたのは国家の建設ではなく世界的な革命だと信じていたため、継承の問題には関心がなかつた。一九一七年のロシア革命とは世界に向けたものであり、文明に火を放ち、新たな歴史を始めるための雷の一撃だった。この予言が破綻すると、ボルシェヴィキは自らが支配する領土に新たな国家、すなわち彼らがソ連と呼ぶ新たな体制を築くほかに道はなかつた。

一九二二年に創建されたソ連では、共産党が権力を握っていた。共産党が正統性を主張したのは、法理や過去との継続性からではなく、革命の栄光からであり、輝かしい未来を約束したからだった。原則として、労働者階級がすべての権限を握っていた。そして労働者たちを党が代表し、党を中央委員会が、中央委員会を政治局が、政治局をたいていはレーニンやのちのスターリンのような一人の指導者が代表した。マルクス・レーニン主義は「必然性の政治」だった——すなわち物事の成り行きは前もって決まっており、社会主義が資本主義に取って代わり、党の指導者たちが物事を細部まで知り尽くし、計画を立てる。初期の国家は、時間を加速させ、資本主義がどこかよそで構築した工業を模倣するという明確な目的に沿って築かれた。ひとたび工場や都市が国内にできたなら、ソ連は所有の原理を元に戻し、社会主義的調和が生まれ、国家は消失しうる……はずだった。

ソ連の国家統制下にある農業や計画経済は、近代的なインフラを生みだしたはしたが、労働者が権力を持つことはなかつたし、国家が消滅することもなかつた。継承原理が確立されたためしかなかったのが、指導者が亡くなるたびに体制そのものが脅かされた。一九二四年のレーニンの死

後、スターリンがライバルたちを蹴落として――そのうち何人かは殺された――権力を掌握するまでに六年かかった。スターリンは第一次五カ年計画（一九二八―三三年）という劇的な近代化を取り仕切った。この計画は、何百万人もの飢餓と、加えて何百万人もの強制収容所送りを代償に、都市と工場を建設するものだった。スターリンは、ソ連市民六八万二六九一人が統殺された一九三七年から三八年の大テロル、ソ連とナチス・ドイツが同盟を結び国境が西へと拡大していた一九三九年から四一年にかけてのそれよりは小さなテロルの筋書きを書いた。こちらのテロルで行われた多くの大量殺人や流刑のなかには、一九四〇年にカティンをはじめとするさまざまな場所で行われた二万―八九二二人のポーランド市民の殺害も含まれていた。

一九四一年にスターリンは同盟国のヒトラーに裏切られて面食らったが、一九四五年に赤軍が勝利してからは、自らを社会主義計画とロシア国家の救済者に見立てていた。第二次世界大戦後、ソ連は西の国境に沿って（ポーランド、ルーマニア、ハンガリー、チェコスロバキア）ないし近辺に（ブルガリア）、自国の体制を模した、帝国に擬せられる影響圏を持つことに成功した。また、もともとはスターリンがヒトラーと同盟を組んだおかげで併合したバルト三国（エストニア、ラトビア、リトアニア）を、ふたたびソ連に取り込んだ。

一九五三年のスターリンの死後、唯一の権力継承者候補が殺害され、一九五〇年代の終わりまでにはニキータ・フルシチョフが権力基盤を固めたかに思われた。が、一九六四年にはレオニド・ブレジネフがフルシチョフに取って代わった。スターリンの最も有力な後継者であることを証明したのはブレジネフだった。それは彼が時間に対するソ連の態度を定義し直したからだ。つ

まり、マルクス主義者の必然性の政治を葬り去って、ソ連の「永遠の政治」に置き換えたのだ。

ボルシェヴィキ革命とは、若い世代のため、資本主義後の新たなスタートを切ろうと行われたものだった。このことを国内はもとより、とりわけ国外で印象づけたのは、新たな顔ぶれが党内序列で上昇できるようにした血の粛清だった。こうした粛清が終わった一九六〇年代になると、ソ連の指導者たちはソヴィエト国家とともに老いていた。一九七〇年代になると、ブレジネフは来たるべき共産主義体制の勝利ではなく、「現存する社会主義」について語った。いったん国民が未来に何の進歩も期待しなくなったとき、ユートピアが消えたあとの空白は郷愁の念で埋めるしかなかった。ブレジネフは、未来は完璧なものになるとの約束を、スターリンや第二次世界大戦におけるその指導力への崇拜に置き換えた。革命の物語とは必然的、な未来についてのもので、戦争の記憶とは永遠の過去についてのものだった。この過去とは汚れなき犠牲でなければならなかった――よって、スターリンがヒトラーと同盟を組んで戦争を始めたことに触れるのはタブーどころか非合法になった。必然性の政治が永遠の政治になるためには、歴史的事実など犠牲にする必要があったのだ。

十月革命の神話はあらゆることを約束したが、大祖国戦争の神話は何も約束しなかった。十月革命は、「人類は兄弟である」という架空の世界を予見した。一方、大祖国戦争を偲ぶことは、西側からファシストが永遠に戻ってくることを想起させた。彼らファシストは、ソ連――いやいやもつと単純にロシアと言った方が良いが――を破壊しようとする虎視眈々なのだ。極端な希望をもたせる政治が、（通常兵器や核兵器に莫大な費用を投じることを正当化する）底なしの恐怖の政治に道を

譲った。モスクワの赤の広場で行われた赤軍の派手な軍事パレードは、ソ連が変革できないことを証明するものだった。二〇一〇年代にロシアを支配したのは、この精神のもとに教育された者たちだった。

赤軍の実際の展開についても同じことが言える。その目的はヨーロッパの現<sup>ステータス</sup>状を維持することにあった。一九六〇年代に、チェコスロバキアの共産主義者のなかに共産主義体制を一新できると信じる者がいた。一九六八年、ソ連率いるワルシャワ条約機構軍が、改革派の共産主義者を打倒すべくチェコスロバキアに侵攻したとき、ブレジネフは「友愛的支援」と称した。ブレジネフ・ドクトリン（制限主権論）によれば、ヨーロッパの共産主義国での、モスクワが脅威とみなすいかなる動きもソ連軍が阻止することになっていた。チェコスロバキアへの介入後に樹立された政権は、その時点での空気を周到に読んで「正常化」という言葉を使った。「正常」とは、あがままを指していた。それ以外の言い方をブレジネフ政権下のソ連で口にしたら、精神病院送りは必至だった。

ブレジネフは一九八二年に亡くなった。その後、死期が迫った男たちによる短い政権を二つ挟んで（ユーリ・アンドロポフとコンスタンティン・チェルネンコ）、一九八五年にはミハイル・ゴルバチョフが権力の座に就いた。ゴルバチョフは、共産主義は改革可能であり、より良い未来が約束されていると信じていた。彼の一番の敵は共産党そのもの、とりわけ現<sup>ステータス</sup>状に慣れて硬直化したロビイストたちだった。そこでゴルバチョフは、党を掌握するために新たな制度をつくろうとした。また、東ヨーロッパのソ連衛星圏の共産党指導者たちにも自分を見習うよう促した。経済危

機と政敵たちに直面していたポーランドの共産主義者たちは、ゴルバチョフの言葉を信じて一九八九年に部分的自由選挙を実施したが大敗した。これによってポーランドに非共産党政権が誕生し、東ヨーロッパのいたるところでこれを模した革命が勃発した。

ソ連の内部でゴルバチョフもまた同様の問題に直面していた。そもそも一九二二年に成立したときからソヴィエト国家は、ロシア、ウクライナ、ベラルーシ、ザカフカース（当初）の共和国で構成される連邦のかたちを取った。ゴルバチョフの願うところでは、ソヴィエトの改革とは、一五ある連邦構成共和国を活性化することが目的だった。さまざまなソヴィエト共和国で、経済改革を実行する新たなエリート層を生み出すために民主選挙が実施された。たとえば、一九九〇年三月にロシア・ソヴィエト連邦社会主義共和国で行われた選挙では、新たな議会の創設がなされ、ボリス・エリツィンが議長に選ばれた。ソ連がロシア共和国を正当に扱っていないと信じている点で、エリツィンは民主主義が生んだニューリーダーの典型だった。どのソヴィエト共和国でも、他の地域の利益のために、自分たちが連邦に利用されているにちがいないと人々は信じていた。

一九九一年の夏に危機が訪れた。ゴルバチョフ自身は党によってその正統性を認められていたのだが、それでも国家をもって党の代わりになろうとしていた。そのためには、ナシヨナリストの不満、政治不安、不景気といった空気が漂うなか、各共和国の状況を把握でき、かつ中心となる機能を果たす拠点も築ける……そんな手立てを見つける必要があった。ゴルバチョフの解決策は、その年の八月に調印が予定されている新連邦条約だった。ところがゴルバチョフは、別荘で



にすぎない。たしかに一九九〇年代の初めには、このように制度上あいまいな権力の主張はよくあることだった。東ヨーロッパにおけるいわゆる「ソヴィエト帝国」、ついでソ連自体が崩壊したので、さまざまな秘密裏の妥協、円卓交渉、部分的自由選挙によって、異種交配の制度からなる政府が誕生した。その他の旧共産主義諸国では、その後自由で公正な大統領選挙と議会選挙がすみやかに行われた。一方、ロシア連邦は、エリツィンを正式に認めるか、もしくは後継者に道を開いたかもしれない選挙を実施できなかった。イリインは予測しなかったものの、イリインの主義とは容易に折りあえる展開のなか、超富裕層がロシアの救世主を選んだのだ。

エリツィンを取り巻く少数の金持ちは、この段階で「オリガルヒ」と呼ばれるようになり、大統領と自分たちに有利に働くよう民主主義を操ろうとした。ソヴィエトの計画経済が終わったことで、高収益産業と資源の開発が猛烈な勢いで進み、裁定取引が活発化し、たちまち新たな富裕階級が誕生した。無軌道な民営化は、少なくとも従来の意味での市場経済とはまったく異なるものだった。市場には法の支配がなくてはならず、これがソ連崩壊後の転換期における最も難しい課題だった。アメリカ人には法の支配は当たり前なのに思えるので、必要な制度はいずれ市場がつくってくれるだろうと思うかもしれない。だが、これは間違いだ。重要なのは、新たに独立した国家が法の支配を確立したかどうか、そして何よりも自由選挙によって権力の移行が合法的に行われたのかどうかである。

一九九三年にエリツィンはロシア議会を解散し、議員たちを押さえつけるべく軍隊を送りこんだ。エリツィンは西側の首脳陣に、これは市場改革に弾みをつけるうえで必要な合理的措置である、アメリカのメディアでも受け入れられる類いの出来事だと説明した。市場が活性化されていくかぎり、必然性を唱える政治家たちは議会への攻撃を民主主義に向かうステップだとみなすことができた。エリツィンは議会との対立を、大統領職の強化を正当化する口実に利用した。一九九六年、エリツィンの一派は（自ら報告しているように）いかがわしい大統領選挙で、大統領の任期をもう一期勝ち取ることになる。

一九九九年にもなると、エリツィンは見るからに病氣とわかり、しじゅう酔っ払っていたので、後継者探しが急務になった。エリツィンを交代させるには選挙が必要だったが、オリガルヒたちからすれば、選挙が操作され、結果が意のままになる必要がある。エリツィンの「ファミリ―」（通常の意味での彼の身内と、ロシア語の意味での親しいオリガルヒたちの双方）を生き存えさせ、その富を維持できるようにする後継者が必要だった。クレムリンで「後継者作戦」と呼ばれたこの課題には、二つの段階があった——まずはエリツィンとの関係が知られていない新しい男を見つけてきて、次いでエセの問題をでっちあげ、この男が解決できたかのように見せかけるのだ。

後継者を見つけるために、エリツィンの取り巻きは人気のエンターテインメントに出てくる好きなヒーローについての世論調査を行った。勝者はマックス・ステイルリッツだった。ソ連のスパイ小説シリーズに登場するヒーローで、小説は何度も映像化されている。なかでも有名なのは、一九七三年にテレビで放映されたシリーズ番組『春の一七の瞬間』だ。架空の人物であるステイルリッツは、第二次世界大戦時にドイツ軍情報部に潜入したソ連の諜報部員、すなわちナチの軍服をまとった共産主義者のスパイだった。KGBに在職中は東ドイツの地方都市でさほど重要で

にすぎない。たしかに一九九〇年代の初めには、このように制度上あいまいな権力の主張はよくあることだった。東ヨーロッパにおけるいわゆる「ソヴィエト帝国」、ついでソ連自体が崩壊したので、さまざまな秘密裏の妥協、円卓交渉、部分的自由選挙によって、異種支配の制度からなる政府が誕生した。その他の旧共産主義諸国では、その後自由で公正な大統領選挙と議会選挙がすみやかに行われた。一方、ロシア連邦は、エリツィンを正式に認めるか、もしくは後継者に道を開いたかもしれない選挙を実施できなかった。イリインは予測しなかったものの、イリインの主義とは容易に折りあえる展開のなか、超富裕層がロシアの救世主を選んだのだ<sup>12</sup>。

エリツィンを取り巻く少数の金持ちらは、この段階で「オリガルヒ」と呼ばれるようになり、大統領と自分たちに有利に働くよう民主主義を操ろうとした。ソヴィエトの計画経済が終わったことで、高収益産業と資源の開発が猛烈な勢いで進み、裁定取引が活発化し、たちまち新たな富裕階級が誕生した。無軌道な民営化は、少なくとも従来の意味での市場経済とはまったく異なるものだった。市場には法の支配がなくてはならず、これがソ連崩壊後の転換期における最も難しい課題だった。アメリカ人には法の支配は当たり前のことに思えるので、必要な制度はいずれ市場がつくってくれるだろうと思うかもしれない。だが、これは間違いだ。重要なのは、新たに独立した国家が法の支配を確立したかどうか、そして何よりも自由選挙によって権力の移行が合法的に行われたのかどうかである。

一九九三年にエリツィンはロシア議회를解散し、議員たちを押しさえつるべく軍隊を送りこんだ。エリツィンは西側の首脳陣に、これは市場改革に弾みをつけるうえで必要な合理的措置である、アメリカのメディアでも受け入れられる類いの出来事だと説明した。市場が活性化されていくかぎり、必然性を唱える政治家たちは議会への攻撃を民主主義に向かうステップだとみなすことができた。エリツィンは議会との対立を、大統領職の強化を正当化する口実に利用した。一九九六年、エリツィンの一派は（自ら報告しているように）いかがわしい大統領選挙で、大統領の任期をもう一期勝ち取ることになる<sup>13</sup>。

一九九九年にもなると、エリツィンは見るからに病氣とわかり、しじゅう酔っ払っていたので、後継者探しに急務になった。エリツィンを交代させるには選挙が必要だったが、オリガルヒたちからすれば、選挙が操作され、結果が意のままになる必要があった。エリツィンの「ファミリア」（通常の意味での彼の身内と、ロシア語の意味での親しいオリガルヒたちの双方）を生き存えさせ、その富を維持できるようにする後継者が必要だった。クレムリンで「後継者作戦」と呼ばれたこの課題には、二つの段階があった——まずはエリツィンとの関係が知られていない新しい男を見つけ、次いでエセの問題をでっちあげ、この男が解決できたかのように見せかけるのだ<sup>14</sup>。

後継者を見つけるために、エリツィンの取り巻きは人気のエンターテインメントに出てくる好きなヒーローについての世論調査を行った。勝者はマックス・スティルリッツだった。ソ連のスパイ小説シリーズに登場するヒーローで、小説は何度も映像化されている。なかでも有名なのは、一九七三年にテレビで放映されたシリーズ番組『春の一七の瞬間』だ。架空の人物であるスティルリッツは、第二次世界大戦時にドイツ軍情報部に潜入したソ連の諜報部員、すなわちナチの軍服をまとった共産主義者のスパイだった。KGBに在職中は東ドイツの地方都市でさほど重要で



もない職に就いていたウラジミール・プーチンが、物語のスタイルリッツに最も近いと思われる  
〔著者註…プーチンの方も、スタイルリッツという物語の登場人物を師として描き、大統領になってからは、一九  
七三年のテレビ版でスタイルリッツを演じた俳優を叙勲することになる。その俳優ウヤチエスラフ・チーホノフは、  
二〇〇四年と二〇一〇年にニキータ・ミハルコフが監督した映画にも出演していたが、このミハルコフがおそら  
くプーチンにイリインの著作を紹介したにちがいない〕。プーチンは一九九〇年代にサンクトペテルブル  
ク市長の補佐官に出世するとクレムリンに知られる存在になり、また団結を乱さない人間である  
と思われていた。一九九八年以降は、主としてロシア連邦保安庁（FSB、旧KGB）長官として  
モスクワでエリツインに仕えていた。一九九九年八月にエリツイン政権の首相に任命されたとき、  
プーチンの大衆への知名度は低く、全国規模の選挙の有力候補者にはなれなかった。彼の支持率  
は二パーセントだった。したがって、そろそろこの辺で彼が解決したように見せかけられる危機  
をでっちあげる必要があった。<sup>15</sup>

一九九九年九月、ロシアのいくつかの都市で爆破事件が連続して発生し、何百人ものロシア市  
民が犠牲になった。実行犯はFSBの職員の可能性が有ると思われた。たとえばリヤザン市では、  
爆破事件の容疑者としてFSBの職員が地元の同僚によって逮捕された。当時、自作自演のテロ  
の可能性が囁かれたが、爆破に関与したとみられるロシアのある地域との新たな戦いをプーチン  
が命じると、事実に基づく疑念は高潔な愛国心の前に霧消してしまった——この地域とは、コー  
カサス地方に位置する南西ロシアにあるチェチェン共和国のことで、一九九三年に独立を宣言し  
たのち、ロシア軍と戦って現在は膠着状態にあった。チェチェン人と爆破との関係を証明するも

のは何もなかった。第二次チェチェン戦争のおかげで、一月にはプーチンの支持率が四五パー  
セントに跳ね上がった。二月にはエリツインが辞意を表明し、プーチンを自分の後継者に指名  
した。偏ったテレビ報道、票集計の操作、テロと戦争が生んだ風向きのおかげで、二〇〇〇年三  
月の大統領選で勝つために必要な絶対多数の票がプーチンに授けられた。<sup>16</sup>

政治の作り話は血で綴られるのだ。

こうして、当時「管理された民主主義」と呼ばれた新しい種類の政治が始まった。ロシア人は  
これに習熟し、のちにはこれを輸出させた。「後継者作戦」で「政治テクノロジ」を認めら  
れたのは、ウラジスラフ・スルコフという父親がチェチェン人の才気溢れる広報の専門家で、彼  
はエリツイン政権で大統領府長官補佐官を務めていた。謎めいた大統領候補にフレームアップさ  
れた危機を利用して本物の権力を握らせるといふ、スルコフが先駆けて行った民主主義の舞台監  
督の役割を、スルコフはプーチンから一連のポストを任されたあとも続けた。

プーチンが大統領を務めた最初の二期、つまり二〇〇〇年から二〇〇八年までのあいだ、スル  
コフは人気を獲得するか制度を変更するために、処理しやすい紛争を利用した。二〇〇二年、ロ  
シアの保安部隊がテロリストから劇場を奪還する際に一〇〇人を超えるロシアの民間人を殺害し  
たあとは、テレビ局が完全に国の支配下に置かれた。さらに二〇〇四年に地方の学校がテロリス  
トに占拠されたあとは、選挙で選ばれる知事職が廃止された。この決定を正当化するために、ス